

青年海外協力隊員の異文化適応 シリアおよびザンビア滞在を事例として

丸山英樹・上原麻子

広島大学大学院国際協力研究科

大学院生・教授

〒739-8529 広島県東広島市鏡山1-5-1

E-mail: hidekim123@yahoo.com/auehara@hiroshima-u.ac.jp

1. 青年海外協力隊員における異文化適応の課題

(1) 協力隊の組織としての課題

青年海外協力隊（協力隊）とは、自分の持つ技術や経験を開発途上国のために生かしたいと考える若者を、それらの技術を求める国々へ派遣する、国際協力事業団（JICA）がその事業として構成する日本人青年の集団である。隊員となる者は、2回にわたる選考を通過し、原則2年間途上国に派遣される。協力隊事務局では、隊員の現地における生活や任務が支障なく、はかどるよう出発前に約3ヶ月の合宿訓練を行い、さらに、現地に着直後にも現地の事情に合わせた約1ヶ月の現地訓練を行っている。また、派遣中は調整員や医療調整員が隊員の業務や健康面の支援を行う。そして帰国後にも健康や進路に関する数日の研修を行っている。しかし、こうした隊員の活動に対する組織的な支援にもかかわらず、隊員が派遣先で遭遇する困難が現在も報告されている（中根、1980a；徳山、1998、1999；久米、2001）。

(2) 協力隊員の個人としての問題

派遣中の隊員は、実際に現地で仕事や人間関係において問題に直面したり、身体的にも心理的にも課題を抱える場合が少なくない。彼らは、言葉の問題や任国の人々との間の相互の高い期待、食事や他の生活上の日本との相違、必要な機材不足、相手とのやりとりにおける困難等々により、スト

レスや苛立ちを感じることが多い。

異文化適応に関して、これまで日本では「帰国子女」、日本企業で働く日本人とその家族などを対象とした一般的な異文化適応に関する研究は多い（星野、1980；稲村、1980a；小林、1980；近藤、1981他）。それに対し、毎年1,000人以上の日本人青年が途上国各地に派遣されている隊員についての異文化適応を扱った体系的な研究はまだ少ない。またその数少ない隊員の異文化適応研究も隊員の一般的な問題について論じており、地域を特定して、現地に滞在する隊員を直接に調査した彼らの適応に関する研究はまだほとんどない。異文化における全隊員に共通の課題があるであろうが、地域的、文化的に異なる問題もあるかもしれない。隊員に一般的な課題と特定地域に滞在する者特有の困難を体系的に調査することは、協力隊への組織的、個人的な支援を一層有効なものにしていくために必要であろう。

そこで本研究では、シリア・アラブ共和国およびザンビア共和国という2つの異なる国に派遣中の隊員を対象に、彼らの異文化適応について研究した。具体的に、以下の2つの設問を研究課題として調査を行った。1) シリアおよびザンビア派遣中の隊員が現地での活動、あるいは生活上での問題があるかどうか。また、あるとすればそれは何か。2) さらに、問題があるとすれば、それは滞在期間に従って変化があるかどうか。

2. 協力隊員の異文化適応に関する研究

人類学者の中根(1980a)は、現地に滞在中の隊員を面接し、彼らの異文化への適応について調査を行った。彼女は隊員たちを全体的に肯定的に評価しながらも、適応に到る個人差が大きいことを観察している。特に、早く適応したように見える場合でも、現地文化を恣意的に理解していたり、逆に時間を要していても、深い現地理解をしている場合があることを分析している。また仕事への意欲が高いにも関わらず、現地で用意されているはずの仕事が何もないという状態に、やりきれなく辛い気持ちになる隊員がいることも記述している。中根は、途上国のために役立つという高い動機を持って仕事をしに来た隊員が、何もしないでいる状態に罪悪感を持つ心理を分析している。しかし、彼女は、そういった罪悪感を持ったり、辛い気持ちになる隊員の思考の根底に、日本人の上下関係の感覚や思い上がりが存在する場合があることも言及している。また、彼女は一般に隊員の中には、貧しく遅れている途上国の人々に「教えてやるんだ」という意識が存在することや、外国で仕事をすることが初めての場合は容易ではないことに気付いていない者がいると指摘している。

日本語教師隊員としてチュニジアに派遣された経験をもつ徳山(1998)は、仕事・生活上で困難を感じた点について、現地の組織・制度と関係する状況的要因を明らかにすることを目的に、派遣中の日本語教師隊員を対象に質問紙調査を実施した。63人から回答を得て、彼女は自由記述回答の内容分析をし、その結果をこの論文に報告している。徳山は、派遣先の職場に対する適応の阻害要因として、隊員活動における国際関係とステレオタイプの問題、隊員と学校組織との間における役割葛藤などを挙げ、異なることを否定的にとらえる回答が多かったと記している。それは、自文化に優越感をもつ自民族中心主義的な傾向を持つ隊員の例ではないかと分析している。

徳山(1999)はまた別の報告で、日本語教師に限らず、1995年に派遣中であつたすべての隊員を対象にした質問紙調査を行っている。回収された844名の回答から、自由記述回答についてのみ内容分析を行い、報告をしている。彼女は、隊員が

日本の通念に縛られた生活をしているため、日本人隊員に共通の問題が存在すると分析し、阻害要因をまとめた。まず語学の問題として、徳山は隊員活動が開始されるまでに行われる語学研修は初級レベルで、実際に仕事を現地でこなすには、不十分であることを指摘する。次に、組織の仕事に対する効率性の問題である。効率を下げる大きな要因の一つに、職場の人間関係を挙げ、現地人の同僚とのコミュニケーションや他の援助団体の人々との軋轢などが、隊員活動の阻害になっていることを報告している。そして隊員が現地の職場のやり方に不慣れなために感じる、職場の無計画さも阻害要因の一つだと指摘する。また派遣地域に関係なく、隊員に共通する問題として、日本と異なる様々な物事のやり方を間違っていると考える傾向がある点を挙げている。

異文化コミュニケーション研究者の久米(2001)は、米国の平和部隊と日本の協力隊に関する文献調査をもとに、帰国した協力隊員と現地で活動中の隊員の合計44人に対し面接調査を行った。その結果、隊員の多くが言葉で苦勞しており、仕事上で詳細な表現が必要な場合には非常に時間を要していると報告している。彼は、隊員が非効率的である、約束を守らないなどと現地の人々に対し持つ印象は、無意識のうちに彼らが日本人と比較している結果であると分析する。日本は世界の中でも異人種・異民族の統合が進んでおらず、ブランド志向の強い社会であるため、人は偏見を持ちやすく、自民族中心主義の傾向があるが、隊員はそれを克服する可能性のある経験をしてもいと記述している。

こうした、協力隊に関する研究では、現地において滞在の経過とともに隊員個人に変化が生じたり、直面する困難の解決を図るようになるといった記述がある。また隊員の中にも、日本の基準を現地の仕事に当てはめて判断するような自民族中心主義的な傾向があり、それを認識して克服することが現地での仕事を順調にすることになるといった指摘もあった。しかしながら、これらの研究は、隊員の滞在する文化毎に調査されおらず、隊員が経験する困難もそれらが時間の経過にともなって変化があるのかどうかについて研究されてない。本調査は隊員の異文化適応研究についてのこうし

た点を克服すべく試みられた。

なお、本研究で使用する重要な用語である適応については、次のような操作的な定義をした。適応とは、異なる文化環境の下で心身とも概ね健康で、極度のストレスを感じずに、任務を含めた日常生活を送ることができ、自他共にその行動に大幅な逸脱が見られないと知覚する状態を指す。つまり、これは大きな病気にかかることなく、任国の文化に対して比較的良好な感情を持ち、仕事の上でも生活面でもまずまずの良い対人関係を保ち、極端なフラストレーションやストレスのない状態を意味する。ただし、本研究におけるこの適応概念は、ファーンハムとボクナー（Furnham and Bochner, 1986）が従来の研究に対して指摘するような、全てを現地文化に同化させようとする「自民族中心主義」や、不適応が精神医学的に治療されるべきという否定的な含意はない。むしろ本研究では、彼らの主張する異文化移行期は「文化学習の過程」であると理解し、隊員の現地での経験を否定面、肯定面を合わせて調査した。

3. 研究方法と分析

本調査では質問紙技法を用いた。質問紙を選んだ最大の理由は、距離の制約があったためである。異文化への適応とは、異文化に移行し、その土地の生活に慣れていく過程であるため、十分な調査をするには出発前から滞在期間中にかけて縦断的（longitudinal）¹⁾に現地での面接・観察調査も行われるべきである。したがって、一回限りの質問紙調査だけで個人の適応・不適応の度合いを断定できない。しかし本研究では質問紙に滞在期間の経過による適応上の課題の変化を反映できるように質問項目を設定して、横断的調査（cross-sectional study）を行った。

使用した質問紙は、次のような4部から構成されていた。1) 回答者の属性等に関する設問。2) 任国の環境についての設問。3) 隊員の経験する身体面、心理面、対人関係、仕事面、現地の環境における問題の有無、およびその該当時期。4) 隊員が経験する傾向のある問題に関する自由記述式設問。本稿では、特に第3部でたずねた隊員の異文化適応に関する回答部分を中心に報告する。

本調査に重要である第3部（表1）は、海外在

表1. 異文化適応の測定に使用した質問項目

1 寝込むほどの病気になった	23 口論をするようになった
2 体調が良い	24 日本へ電話をしたり、手紙を書く
3 下痢をする	25 現地で興味深いものを発見した
4 体力が落ちたと感じる	26 日本との違いを強く感じる
5 医者によくかかる	27 現地の文化をけなすことがある
6 夜寝ることがつらい	28 一般的にこの任国が好きだ
7 任国に来て良かったと思う	29 一般的に任国の人が好きだ
8 苛立ちを感じる	30 日本語を読みたくなる
9 気分が落ち込む	31 良くも悪くも人種差別を受ける
10 すぐに腹が立つことがある	32 住み心地が良いと思う
11 何か焦る気持ちになる	33 不潔だと感じる 때가 多い
12 一人でする外出が怖い	34 病気にかかるのが恐ろしい
13 フラストレーションがたまる	35 日本より任国の方が良いと思う
14 自分の将来に不安を感じる	36 盗難にあいそうである
15 一人のとき、無性にさびしくなる	37 物事に自信が持てない
16 自殺したいと思うことがある	38 趣味の活動をよくする
17 現地の人と交流がうまくいかない	39 現地に敵意を持っている
18 言葉に苦労した	40 欲しいものが手に入らない
19 日本人で親しい人ができた	41 仕事面が不調である
20 現地の親しい人ができた	42 日本に比べて非効率だと思う
21 近所づきあいは多い	43 無断に仕事を休むことが増えた
22 他人がわずらわしく感じる	44 何をしても情報が少ないと感じる

住日本人の適応に関し、環境条件から心身の自覚症状までと、多面的に調査を行った精神医学者稲村（1980a）の質問項目を参考に作成した。稲村の質問内容を参考にしたのは、次の3つの理由による。第一に、彼が技術的先進国のみならず、途上国における日本人の異文化適応状況について調査を行ったためである。第二に、稲村は異文化適応を多様な側面として捉えていて、それらが調べられるように項目を構成していたことによる。第三に、稲村はそのような多面性をもつ不適応症状が内的に関連する傾向があると分析をしていたためである。

本調査では、まず身体面（6項目）、心理面（3項目）、対人関係（9項目）、仕事面（5項目）、現地の文化・自然環境（11項目）において、隊員が困難または肯定的な経験をしたかどうかをたずねた。この異文化適応を測定する全質問項目の中、肯定的な質問の数は11で、否定的なもの数は33であった。なお、項目により多面的な意味合いを持つものがあつたが、本調査では上記の括弧内に記すように分類し検討した。

次にそれらの経験について、下の図（図1）にあるように、赴任後からどの時期に経験したかを、（よく当てはまる）、（当てはまる）、無回答の3段階評価でたずねた。

経過時期	3ヶ月	半年	9ヶ月	1年	1年 3ヶ月	1年半	1年 9ヶ月	2年
体調が良い								
下痢をする								

図1. 質問紙の記入方法

注) 派遣期間が1年半の場合、該当しない時期には無回答となり、1年9ヶ月以降は空欄となる。

隊員の適応が滞在期間に従って、どう変化していくのかを分析する方法として、まず各項目への回答における を2点、 を1点、無回答を0点として計算を行った。また、肯定的な内容である質問項目ならばプラス、否定的な質問項目をマイナスとし、隊員ごとに合計点数を算出した（理論的範囲値：22から-66）。質問内容が肯定的、または否定的とも解釈できる項目の場合、今回は否定的なものとして扱っている（例、「49）日本へ電話をしたり、手紙を書く」これはホームシックと

解せる可能性があるためである）。次に、回答してくれた隊員を半年毎の滞在期間ごとに分けた。そして最後に、滞在期間毎の総得点を、その期間を経過した隊員の人数で割って、一人当たりの平均点を出し、期間別に隊員が感じる困難の度合い、すなわち「適応度」を出した。

質問紙は、元隊員の協力による事前テスト（pre-test）を経て、協力隊事務局の許可を得て、シリアおよびザンビアへ2000年8月に郵送し、現地の協力隊事務所の協力を得て配布して貰った。同年10月に、当時の両国への派遣中の隊員104名のうち、60名から回答が寄せられた。回収率は57.7%であった（シリア42名中32部、回答率76.2%；ザンビア62名中28部、45.2%）。

4. 結果

(1) 回答者の属性

全体の平均年齢は28.4歳（範囲21～42歳）であった。国別には、シリア滞在の隊員の平均年齢は28歳（範囲22～39歳、最頻値26歳）、ザンビアでは28.8歳（範囲21～42歳、最頻値25歳）であった。全体としては、20代後半（26～29歳）の隊員が27名（45%）と最も多かった。ザンビアでは20代前半、後半、30代以上の3集団の人数はほぼ同じであった。性別では、男性30名（50%）、女性28名（46.7%）で、男女ほぼ同数である⁽²⁾。平均年齢ならびに男女比に関して、近年の協力隊参加者全体の傾向とほぼ同じであった（JICA, 1996, 2000）。しかし国別に見ると、シリア隊員には女性（18名、56.3%）が、ザンビア隊員には男性（17名、60.7%）が比較的多かった。

隊員の滞在期間である2年を半年毎の4期間に分けた結果、全体としては、派遣後半年に近い隊員が最も多く（21名、67.7%）、次いで任期終了に近くなる1年7ヶ月から2年の滞在期間の隊員が多かった（18名、58.1%）。そして滞在が7ヶ月から1年になる回答者が最も少ない（7名、22.6%）結果であった。シリアでは回答者の中に派遣されて3ヶ月から半年という隊員が15名（48.4%）と多く、ザンビア隊員には任期終了に近い隊員が12名（38.7%）いた。

回答者の協力隊への参加直前の仕事についてた

ずねた結果では、退職して協力隊に参加した回答者が27名(45%)と最多であった。次いで無職の状態だった者が多く(15名, 25%)、休職して参加した隊員は9名(15%)だった。大学や専門学校などを卒業したばかりの隊員8名(13.3%)は、ザンビアにやや多かった(6名, ザンビア隊員中21.4%, シリア2名6.3%)。

協力隊に参加した動機について、協力隊や開発協力への参加、ボランティアになるなどを最初から意図していたものを「高い動機」とし、無記入であったり、なりゆきの結果で参加にいたったや、日本からの逃避などを記した回答を「低い動機」とした。その結果、「高い動機」を持った隊員が多かった(38名, 63.3%)が、「低い動機」の隊員も決して少なくなかった(22名, 36.7%)。

(2) 回答者の現地における認識

また、任務について、配属先で行っている仕事について熟知していなかったという回答をした隊員が多かった(44名, 73.3%)。つまり、今回調査に協力してくれた隊員の4人に3人は、現地で自分の行っている仕事を事前によく知っていたとは言えないと認識していることが分かった。任国についても、多くの隊員がよく知らずに、派遣されたと感じていた(55名, 91.7%)。こうした傾向は両国とも同様であった。これは日本では途上国に関する情報が少ないうえに、途上国と日本の生活には大きな差があるので、派遣前に情報を得ていても、現地では情報の落差をより大きく感じingことを示している可能性もある。

仕事上の言語において、特に大きな問題がないと回答した隊員は全体で25名(41.7%)いた。しかし、全体的には語学について問題を感じている隊員の方が34名(56.7%)と、やや多いことがうかがえた。

そして、現地の対日感情については、シリア隊員の1名を除いて、ほとんど全隊員(59名, 98.3%)が現地の人々の対日感情は良いと感じていた。次に、毎日の食料を手に入れるのが困難であるかどうかをたずねた項目では、ザンビア隊員のうち6名(うち1名は生活も仕事場も都市部)が、食料調達状況が悪いと回答した。当国の僻地では、季節によって入手できる野菜の種類が限られてお

り、保存食などは首都で購入して任地まで運ぶといった苦勞がなされている。ザンビアの回答は、そうした状況が反映されたものであった。

現地における病気の多発について、「はい」と回答した9名は、すべてザンビア隊員であった。そのうち、生活の場が都市部なのは2名(うち仕事場も都市部の隊員1名)であった。現地の治安についてもたずねたが、幸いどの隊員も身の危険を感じるほどの治安の悪さを感じていなかった。

その他、任国における日常生活の支援をしてくれる人や精神的に支えてくれる人の存在を聞いた設問には、多くの隊員が肯定的な回答を記していた。そしてほとんどの隊員(52名, 86.7%)が現地の人とほぼ毎日一緒に仕事をしていた。また訓練所の異文化の生活を模擬体験する研修については、必ずしも役立っていると隊員は感じていないようだった(「役立つ」19名, 31.7%; 「役立たない」38名, 63.3%)。

(3) 困難を含む隊員の経験について

ここでは、本調査の中心である隊員たちの異文化適応に関する回答の主な分析結果を報告する。44項目からなる質問に対する回答は、記述統計を用いて分析した。シリア・ザンビア両国の隊員とも1名ずつが、これらの項目へ無回答であったため、合計58名からの回答を分析対象にした。

全体的な傾向として、隊員がどのような経験をしているのかを大きくまとめてみる。まず最初は、印(当てはまる)と 印(より当てはまる)の別を区別せずに両者をまとめて、各項目の内容を隊員が経験しているか否かのみ注目した。すなわち、一つでも当該項目に印があれば、その項目内容を経験したものとして扱った。その結果、50%以上の者が経験している項目のみを報告する。図2に示されているように、隊員は異文化において肯定・否定の両面を経験していることが分かる。図中の棒グラフは、肯定的な内容への回答の割合を右側(プラス)に、否定的なものは左側(マイナス)に示している。

隊員の多くが感じた困難としては、下痢をする、言葉に苦勞した、日本へよく連絡を取る、日本との違いを強く感じる、非効率だと思う、などである。他方、肯定的な内容としては、体調が良い、

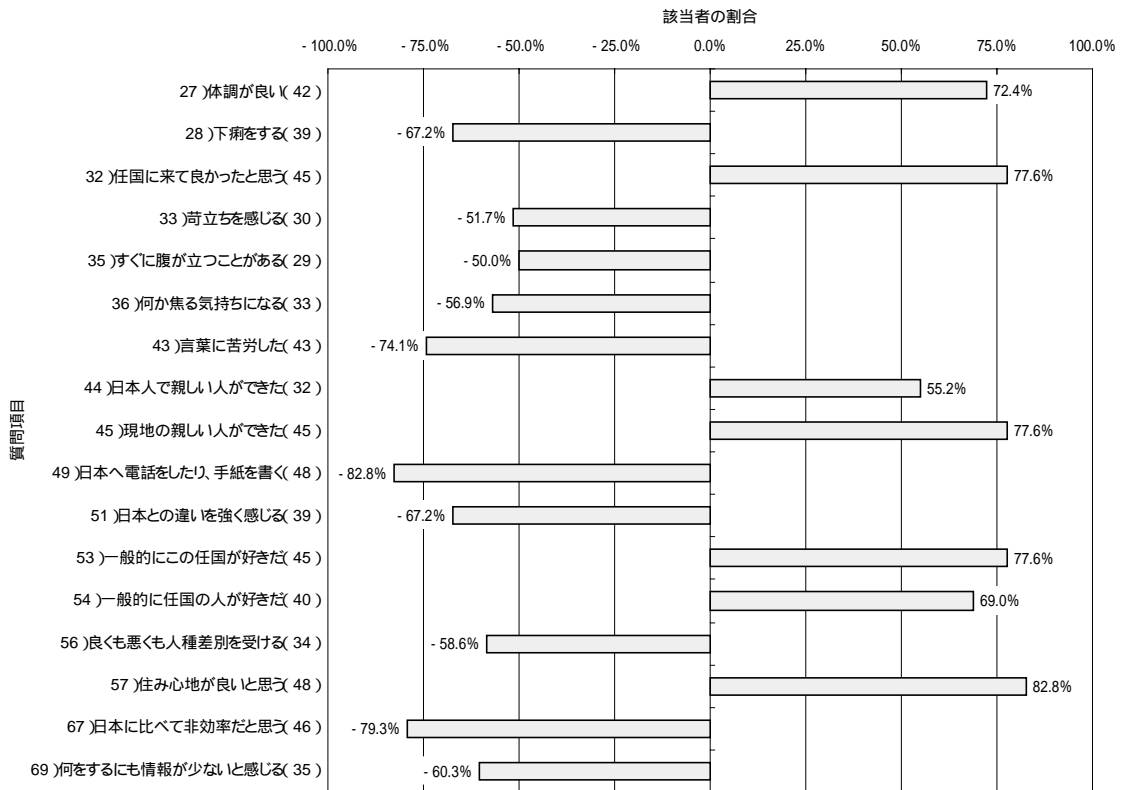


図2．半数以上の隊員が感じた項目

注) 項目の前の数字は設問番号、かっこ内の数字は対象者58名中における該当者の数である。

任国に来て良かった、現地の親しい人ができた、任国が好きだ、住み心地が良いなどである。ここでは、同じ隊員であっても、肯定的および否定的な内容の両者に回答している場合が多いことが留意すべき特徴であった。

シリア・ザンビアの両国間において、該当者の割合が20%以上の差があった項目を見てみると、ザンビアでは、「任国に来て良かったと思う」との回答が多い反面、盗難や病気への恐怖が多く、治安の面、自然環境の面でシリアよりも厳しいことがうかがえた。シリア隊員では全員が「日本へ電話をしたり、手紙を書く」と回答し、多くが情報不足を感じていた。

国別同様に、性別による回答の違いを見てみると、女性隊員の方が孤独や寝込むほどの病気にな

ったり、気分の落ち込みなど、わずかながら課題が多いが、現地の親しい人ができたとも回答する者も多かった。男性隊員には、病気への恐怖と日本語を求める傾向が見られた。

(4) 異文化適応の滞在期間による変化

分析方法で示した手順で検討した結果、本調査における隊員の異文化適応の滞在期間別平均値は次のようになった(表2)。結果は本調査の対象者が滞在期間の経過に従い、適応の度合いを高めていることを示している(図3)。点数がどの期間においてもマイナスであることは、両国に滞在する隊員たちがどの期間をとっても困難を感じていることを意味する。しかしながら本調査の分析結果は、滞在が長くなるごとに隊員の抱える困難

が少なくなっていることを示している。すなわち、隊員らは困難を経験しながらも時間が経つに従い、現地の状況に少しずつ適応していているのである。

表 2 . 滞在期間別「適応度」点数分布

	半年	1年	1年半	2年
人数	58	37	30	18
素点計	- 563	- 270	- 97	- 21
平均点	- 9.7	- 7.3	- 3.2	- 1.2

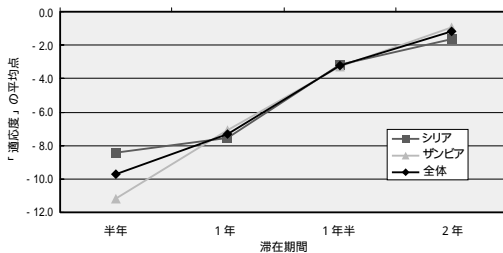


図 3 . 滞在期間別「適応度」の変化

次に、上記のように全体の隊員の「適応度」として数値化したものを詳しく検討するために、身体面、心理面、対人関係面、現地の環境への対応、仕事面と測定した各側面毎にさらなる分析を試みた。ここでは、まず全体的に隊員が各側面において該当した項目を検討し、次に側面ごとの平均値が滞在期間に従ってどのように変化するかを見ていき、最後にその側面内の各項目における時間的な変化を見た。

まず身体面における回答の特徴として、体調が良いと回答している隊員でも、下痢をするだとか、体力が落ちたといった項目に回答していた点であった。次に寝込むほどの病気をした隊員が少なくないことが分かった。中でも、派遣されてからずっと体力が落ちたと感じている隊員や、寝込むほどの病気をした後に体力の低下を感じている隊員がいた。つまり、隊員の多くは調査時には体調が良いと感じながらも、同時になんらかの健康上の問題を体験していたことが分かった。

身体面に関する適応について滞在期間による変化を見るために、各期間の身体的側面の総得点を、各滞在期間の隊員数で割った平均値の変化を検討

した(図4)。この結果は、身体面において、隊員が時間の経過とともに、現地の環境に適応していていることを示している。

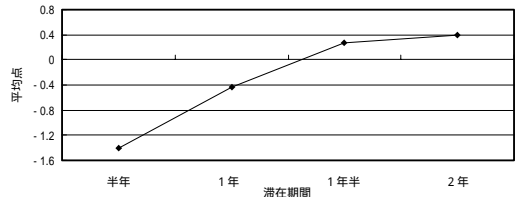


図 4 . 適応の時間的な変化：身体面

この傾向をさらに詳しく検討するため、具体的な項目に対する回答の時間的な変化を見た。顕著な結果としては、肯定的な内容である「体調が良い」との項目について、全体的に滞在期間とともに当てはまる隊員が増えていた。他方、否定的内容である「下痢をする」の項目には、該当者は時間とともに減り続けていた。

続いて、心理的側面に関する結果は、「任国に来て良かったと思う」との回答が45名(77.6%)と最も多く、3分の2以上の隊員が派遣国に来たことを評価していた。しかしその反面、半数前後の隊員が、苛立ち(30名, 51.7%)や焦り(33名, 56.9%)を感じたり、すぐに立腹(29名, 50%)したりしていた。そしてフラストレーションを覚え(23名, 39.7%)、孤独(14名, 24.1%)や、将来への不安を感じている(25名, 43.1%)隊員もいた。これらは、心理的不調を訴える報告である。さらに少数であるが、一人での外出が怖い(5名, 8.6%)や、現地に敵意を持っている(2名, 3.4%)、自殺を考えた(1名, 1.7%)と回答した隊員もいた。

心理面における滞在期間による変化は、図5に示す通り、ここでも時間の経過とともに、隊員が適応に向かっていることが分かった。

心理面における項目を一層詳しく見ていくと、最も該当者の多かった「任国に来て良かったと思う」への回答は、2年滞在の段階で割合はやや下がるが、時間とともに増加傾向にあった。「フラストレーションがたまる」との回答は、滞在1年が経過するまでは強いが、2年目になると減少した。「何か焦る気持ちになる」と回答した隊員の

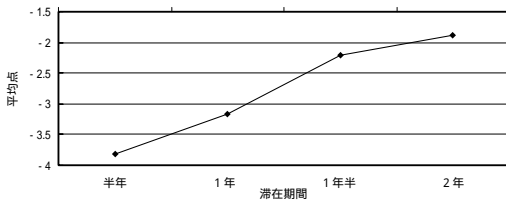


図5．適応の時間的変化：心理面

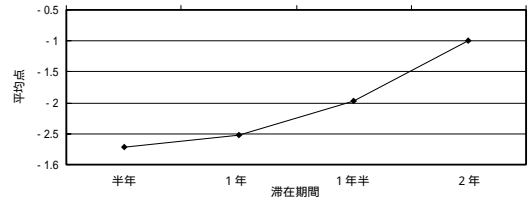


図6．適応の時間的変化：対人関係

割合は、全体的には時間とともに減少する傾向があったが、帰国前に再度上昇した。「自分の将来に関して不安を感じる」との回答は、1年の頃にわずかに少なくなるものの、時間の経過と共に増えた。

対人関係に関する質問項目では、親しい現地の人ができたと報告した隊員は多く（45名，77.6%），また約半数が日本人（32名，55.2%）の親しい人ができたと回答していた。だが同時に、言葉に苦労したと回答した隊員も多かった（43名，74.1%）。しかし、現地の人と交流がうまくいかないとの回答は比較的少なかった（13名，22.4%）。さらに、近所づきあいが多い隊員も30%弱いた（16名）。そして日本人隊員として目立つためか、人種差別を受けるといふ回答もあった（34名，58.6%）。また、電話や手紙などで日本とのやりとりをしている隊員は多かった（48名，82.8%）。

対人関係の側面における課題の時間的変化を見てみると、この側面においても、隊員は任国における対人関係のルールなどを学んだり、交流の仕方を知って、人間関係における問題が少なくなっていることが分かる（図6）。

項目別に、まず、現地の人との交流に関して、滞在期間の経過に従ってうまくいくようになっていた。特に帰国を間近に控えた2年目のほとんどの隊員たちは、交流が上手くいっていると回答していた。しかし口論するかどうかといった設問に対しては、1年半にピークが見られた。

隊員の滞在目的でもある隊員活動、すなわち仕事面に関して、全体として最も目立つ結果は、任国の仕事ぶりが非効率的であると回答した隊員が多かったことである（46名，79.3%）。そして、情報不足を感じている隊員も少なくなかった（35名，60.3%）。また約5分の1の隊員が、物事に自信が持てないと記していた（12名，20.7%）。

そして約40%強は、仕事面が不調であると回答した（25名，43.1%）。そのうえ、無断欠勤を報告する隊員も見られた（7名，12.1%）。これについては現地の事情をさらに面接等で調べる必要があるようである。

仕事面についての滞在期間別回答を見ると、ここでも時間の経過とともに問題が減少する傾向があった（図7）。

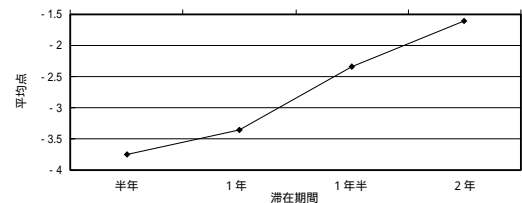


図7．適応の時間的変化：仕事面

項目別に詳しく見ると、「日本に比べて非効率だと思う」との項目への回答は、全体的に減少傾向が見られるが、どの滞在期間においても4割以上の隊員が、非効率性を感じていた。「何をするにも情報が少ない」と感じている隊員も、同様に3割～4割あった。「物事に自信が持てない」に関しては、滞在開始の頃は不慣れな環境にいなながらも、多くの隊員が自信が持てないとは回答していなかった。その数は、半年（22名）、1年（26名）と漸増し、その後1年半（17名）で減少し、2年目には0名になった。最初の意気込み、次に仕事の難しさに直面し、そして何とか工夫をして慣れていく過程を示しているようである。仕事の調子についてたずねた項目でも、不調を訴える隊員は時間とともに減少していた。

最後に、現地環境に関する回答について見よう。任国の環境と日本との違いを約3分の2の者（39名，67.2%）が強く感じながらも、多くの隊

員は住み心地がよい(48名, 82.8%), 任国が好きだ(45名, 77.6%)と回答している。また日本より任国が良いと思う隊員は20%あまり(13名)で、不潔だと感じる隊員も40%(24名)ほどいた。

時間的変化を見てみると、図8のように、ここでは、他の側面に比べると、2年目にやや平均点が下がるという結果になった。しかし一般的には時間の経過とともに上昇するという傾向は他の側面と大きく変わらなかった。

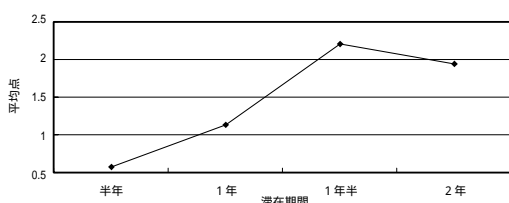


図8. 適応の時間的変化：現地の環境

項目別に見ると、現地の住み心地が良いと感じる隊員は、60%から70%と、どの滞在時期にも多くの隊員が報告していることが分かった。そして日本と任国を比べて、任国の方が良いと回答した隊員の割合は、半年目では5名であったが、2年目には14名と増加傾向にあったことは興味深い。

以上、異文化適応を、滞任者が多様な側面に対応していく過程と理解し、分析を行ってきた。本調査で得られたおもな知見は、次の3点である。

1) 参加してくれた隊員は、派遣期間の経過に従って異文化に適応しつつあった。しかしながら、詳細な検討をすると、時期によって隊員の体験する困難に差があった。心理面や仕事面では、帰国が近づくにつれてやや焦りや不安が高まることが分かった。現地の環境に対しては、滞在期間に従って任国の住み心地の良さや任国についての理解が深まり、該当する隊員の割合は増えた。2) 彼らが現地で経験する傾向のある困難や問題のいくつかが判明した。例えば仕事に関して、日本と比べて非効率であるとか、情報不足を感じる隊員の割合は時期的変化が少ないと考えられる。3) 少数ながらも否定的で深刻な経験をしていた隊員が存在した。例えば、現地に敵意を感じたり、自殺を考えた回答者がいた。

5. 考察にかえて

(1) 滞在期間の経過に従い適応に向かう傾向

本調査では、調査に参加してくれた隊員が、滞在期間の経過に従い適応に向かっていることが分かった。彼らは、仕事上・生活上で多様な面において問題を抱えながらも、滞在が長い者ほど課題が少なく、2年目が最も良かった。滞在期間の経過とともに滞任者が現地に適応していくことは、留学生を対象にした研究(Lysgaard, 1955; Gullahorn & Gullahorn, 1963等)が実証を試みたり、移民を対象にした理論的研究(Berry et al, 1987)等で言及されてきた。しかしこの点について、協力隊の研究ではまだ実証的に調査が進んでいないようである。本調査の参加者が比較的少人数であるので、時間的過程に沿った研究は、今後さらに多人数を対象に行われるべきである。隊員は制度上、任期の途中で帰国することはまれであるため、任期終了が近づくにつれて帰国できることが彼らの心に現実性をともなって現れ、帰国直前の気分の高揚が本調査に反映された可能性もある。それ故、さらなる研究が待たれるが、しかしそうした要因を考慮にいれても、本調査への参加者は滞在期間の長い者ほど、調査をした多様な側面において良い適応状態にあった。

しかし、時間の経過に従い、概ねの者が現地に適応する傾向があることは、身体的、心理的等多面的な課題の全てが直線的に解消に向かうことを意味しない。ある側面における課題が一時的に解決したように感じられても、くり返し異文化において同じ課題により悩まされることもよくある。米国における日本人の不応者のセラピストでもあった近藤(1981)も、異文化においては新参者は日常的なフラストレーションやストレスに悩まされながらも、時間の経過とともに適応するようになる」と記述している。この意味で異文化適応のU型曲線モデルや段階説等は、その過程の一面性を示唆するため、あくまで実践のための範例を示しているに過ぎない。本調査の結果は、近藤の記述および関連する研究(Furnham & Bochner, 1986他)を支持するものである。

また本調査の結果は、中根(1980a)の観察や久米(2001)の調査を支持する結果でもある。中

根によると、隊員は任期2年のうち、前半において現地のシステムを知ることになり、後半になってようやく慣れてくるということであった。現地のシステムは、現地語をはじめ、生活上の習慣や対人関係における規則など、様々な社会を構成する要素から成り立っている。初めて日本以外の場所で活動する隊員にとっては、当初は日本とまったく異なった社会システムに直面することになる。特に、20歳を過ぎてから初めて海外経験をする場合、日本で教育を受け、基本的なパーソナリティができあがってしまっているの、異なるシステムとの出会いにおいて、隊員の側が弾力性を欠き、正面衝突をしやすいであろう（中根、1980a）。異なる現地のシステムに慣れて自分なりに生活や仕事ができるようになるのが、2年目に入ってからであるというのだ。

久米（2001）はまた、多くの隊員が類似した適応パターンを示すと報告している。言葉の問題や慣れないことを克服し、現地で徐々に自分で役割を見つけ、自分が周囲から認められ、仕事ができるようになるまで半年から1年かかるとしている。その期間に約束が守れないのを天候のせいにすることが現地の人の持つ生活の知恵だと分かったり、日本国内と同じように期待をすることが間違っているとか、現地には現地の常識があることを少しずつ理解するようになる。孤独や倦怠感に襲われたら、他の隊員と話をしたり、日本語を読んだり聞いたり、旅行するなど工夫をするようになる。そしてそれまでの努力がある程度の成果を生むようになると、現地の人々も隊員に対する信頼度を増すようになることを経験するのである。

このように先行研究も隊員の異文化適応には、ある程度の期間、任国に滞在することが必要であると論述している。異文化では現地の諸事情を経験を通して体得してこそ、そこで本格的な活躍ができるようになるのである。本調査では、任期前半の1年が隊員にとって不慣れな時期で、後半が良い時期であるという明確な時間的相違ではなく、参加してくれたシリアとザンビアに赴任中の隊員は、滞在期間の長期化にともなって、適応状態が肯定的に変化していっていることが分かった。このような適応とは、それにいたるまでの過程（process）とその過程による結果としての状態

（state）が考慮されるべきだとするベリー（Berry, et al., 1987）の理論的主張を支持することになったとも言える。ベリーらは、異文化適応を果たす個人の方略は複数にあり、個々人は様々な方略を用い、結果も一様ではなく、状況によって周辺化され境界人となることもあると主張する。彼らの論点は、異文化において個人は、否定・肯定の両面の経験をやるが、遭遇する困難も文化を学習することで、また様々な方略を使用することで、ある程度まで克服できることを示唆している。

（2）隊員の経験について

i）多くの隊員が体験したこと

両国に滞在中の隊員の多くが、体調を崩したり、対人関係や仕事面で問題が生じたりしており、全体的に任国において問題を抱える場合が多かった。しかし同時に、任国に来て良かった、現地で親しい人ができたなどのように、肯定的な経験をしている隊員も少なくなかった。異文化滞在において、隊員たちが心身の問題を始め、対人関係や仕事面という多面的な問題を抱えていたという本調査の結果は、アドラー（Adler, P., 1975）や稲村（1980abc）をはじめとする異文化適応の多側面性を主張する先行研究を指示し、協力隊に関しわずかであるが新たなデータを加えるものとなった。

隊員の多くが直面した困難は、現地の非効率性や言語の問題などである。非効率性は、久米（2001）や中根（1980a, 1973）、徳山（1999）が指摘するように、日本の基準が正しいと無意識に捉えているため、途上国においても日本の基準によるものごとを判断する傾向があることを示していると考えられる。徳山は日本語教師として派遣されていた隊員の回答から、時間にルーズであることをはじめ、宗教、治安など、日本と異なる状態や方法を間違っていると考えがちである点を指摘した。本調査で隊員たちが、現地のものごとが非効率であると感じていたことは、現地ではそれが普通であると頭で分かっていたとしても、日本の基準で判断していたためであろうと考える。

これはまた、中根が分析するように、隊員の中には、意識的・無意識的に自分は技術を教えに来ている上司なのだというタテ社会の考えが存在す

るためかもしれないし、また自分の技術をできるだけ多く教えたいという隊員活動への意欲からくるものかもしれない。前者の場合、部下が自分に合わせるのが普通であると捉えてしまうため、自分本意になってしまう。したがって、上下関係で職場の人間関係を捉えがちな隊員の場合、隊員自身が現地の状況を学ぶことを怠ることになる可能性も生じる。後者も同様に、現地の事情を知らずには仕事の達成は難しくなる。時間の経過に従って、隊員の多くは非効率をさほど否定的にとらえなくなるかもしれないが、中にはこのことで適応が困難になるという事態が生じることも考えられる。

言葉に苦労した隊員が多くいたという本研究の結果は、徳山の報告にも見られ、隊員に共通の課題であると見て良いのではないかと考える。隊員の中には、派遣前に確かな技術と経験を持っているが、現地での言葉の問題など重要ではないと考える者もいる。しかしながら、言葉は近所の人たちとのちょっとした会話や買い物などの日常生活においても必要である。さらに重要なことに現地の仕事には、共同作業や計画書や報告書の提出、会議等々、言語が必要な場面は少なくない。隊員が受ける3ヶ月の語学研修だけでは、現地語が使いこなせるようになるとは考えにくく、派遣された後も隊員は語学の学習を継続するべきである。ただし、対人関係能力に秀でた者は、交流の増加に従って語学力をかなり短期間に向上させることができる場合も考えられる(Church, 1980)。しかし、それを短期間で達成することは例外かもしれない。隊員の中には辞書もなく、未習の現地語を赴任先で使用せざるを得ない場合もあるので、継続的に言語の学習をする態度を持つべきであり、また語学修得のためだけではないが、そのためにも現地の人々との対人関係を大切に育てあげる態度を持つべきであろう。

ii) 常に感じられる困難

全体としては隊員の多くが、時間の経過に従って、概ね適応に向かっていたが、調査した項目を詳しく見ると、時間が経過しても、ある程度の割合で常に困難を感じている隊員があった。例えば、心理面の項目である立腹や苛立ち、仕事面の内容

である日本と比較して非効率、情報不足を感じるといった項目では、僅かに減少傾向が見られ、適応に向かっているものの、どの期間においても、該当する隊員が存在した。これは近藤(1981)の指摘するように、異文化接触によって危機的とまでいかななくても、日常的に絶えず感じる困難も存在することがあると推測する。母国で仕事をして仕事には困難が付きものである。しかし、困難の中には研修などで認識を高めることで、低減できるものもあるかもしれない。異文化接触によるものか、さらなる調査が必要である。

また本調査において、項目によっては適応とは逆方向を行く者もいた。例えば、対人関係の側面において、半年から1年半にかけて口論する隊員は増加する傾向が見られ、2年目には減少したがこの項目は、該当者ゼロとまではいかなかった。これは、仕事の内容が深まるにつれて口論する場合もあり、そのような経験を経ることによって、相手のことを理解し、相手に自分のことを理解させることができる。通常、このような過程を経ることで人間関係が深まっていく。しかしながら、ごく少数でも口論などが原因で、長く対人関係がうまくいかない者がいるかもしれないので、この課題についても、今後の面接調査が期待される。

iii) 帰国の課題

心理面の一項目である将来に対する不安は、滞在期間に従って増加する傾向があり、焦りは帰国直前になると該当者の隊員の数が増えていた。確かに、現地の環境に関して、日本よりも任国の方が良いと感じる隊員が時間とともに増加傾向にあったが、この結果は日本へ帰国することへの不安が高まっていることも含まれるのではないかと考える。それは帰国が近づく、と、隊員の中には、特に帰国後の進路に関する不安が非常に大きくなる者もいるためではないかと推測する。またなかには、日本へ帰国した後に下される隊員活動に対する評価を気にし、任国では何か形に残ることをしたいと焦りを感じている場合もあるかもしれない。この点についても継続的な調査が必要である。ブリスリン(Brislin, 1981)は、滞在者の適応を手助けする際、現地の文化に適應することに焦点を当てるのか、滞在者が帰る社会か、異文化適応

の経験を持つ人の「第三の文化」か、それともそれら3つすべてなのか、それらを考慮した支援体制が作り上げられるべきだと指摘する。プリスリンの指摘以外にも、多様な隊員個々人のニーズがあるかもしれない。協力隊事務局の隊員への、帰国を含めた支援体制は改善が重ねられてきているが、その再検討が示唆されているようである。

iv) 適応における各側面の内的関連性

本研究が調査した身体面、心理面、対人関係、仕事面、現地の環境といった各側面は、同様な速度で適応に向かっているわけではなかった。これは当然のことであり、また稲村(1980abc)の主張するように、異文化接触において各側面が別々に反応をしているわけではなく、個人の内部で関連し合っているためと考える。

隊員は時間が経つにつれ、現地の飲料水や食事に慣れ、日常生活が軌道に乗り始める。そこで現地に到着したばかりの頃に比べると、体調も良くなり、充実した時間を過ごすようになる。任国で親しい友人ができ、職場でも同僚との信頼関係を築くようになる。ファーンハムとボクナー(1986)の言うような、現地の親しい「文化的」友人から、任国の風習や習慣を学ぶことになり、より現地のことや人々の行動、考え方を知ることになる。そして新たに知ったことから、現地における仕事や生活に工夫をするようになり、より身体的にも心理的にも、仕事や人間関係も順調になり、現地に対する感情も良くなる。このように、異文化適応には多面的な側面が関連しあって、滞在者の現地の環境における心身の状態を作り上げていると考える。各側面が関連しあうことはまた、例えば、健康の問題のように、1つの面の課題が他の側面に影響し合うことが意味されている。隊員の異文化適応を考える場合、こうした内的に関連する様々な課題を今後も慎重に検討することが重要である。

(3) 深刻な問題を抱える少数の回答者

全体として調査した隊員は、時間の経過とともに適応傾向にあったが、少数ながらも深刻な問題を抱える回答者が存在した。例えば、「自殺したいと思うことがある」との項目には1名、「現地

に敵意を持っている」では2名と、わずかではあるが該当した隊員が存在した。どの回答者も滞在期間が長くなるにつれて、該当しないとの回答へ変化したが、こうした課題を持つ隊員の存在には注意を払うべきであろう。隊員が質問紙に回答するにあたり、回答者が本音とは異なる社会的に望ましい(social desirability)回答を寄せる可能性(Dooley, 1990)を考慮すると、該当しないと回答した隊員の中にも、項目によっては、実際にはさらに当てはまる場合も少数あるかもしれない。

そのため、現在の協力隊事業の体制でも、隊員を支援するための様々な方策が取られているが、こうした少数の問題を抱える者への支援を専門家もまじえ、より一層きめ細かくしていくことが望まれる。

6. 今後の課題

本調査は、対象者の現地滞在中の財政面を考慮しなくてよく、それは異文化適応研究には、一つの好条件であった。しかし二カ国に滞在する隊員60名しか調査できず、適応の時間的変化の検討を主目的としたのに、一度だけの質問紙による研究となった。また、先行研究における一般的な異文化適応に加えて、派遣先の国や地域における文化的な背景やそれに関する課題をより深く記述することもできなかった。例えば、帰国の不安感に関しても、隊員自身の進路の不安に加えて、赴任した途上国がどうなるのか、当該国と隊員の関わりが人生においてどうなるのかといった漠然とした不安が関係することも考えられるため、さらなる調査、特に現地での調査が求められる。また本調査は、日本人の異文化適応として研究を行ったが、将来は他国の国際ボランティア(例、平和部隊)との比較研究もなされるべきであろう。国際ボランティア独自の課題が見えるかもしれない。

これらの問題のためにも、今後の研究課題として、まずはより多くの隊員を対象に、派遣国における隊員への面接調査や参与観察を含めた多技法により、彼らの異文化への適応現象を縦断的(longitudinal)に調査する必要がある。こうした隊員の研究、あるいは比較研究の積み重ねによって、さらに適切で効果的な支援が可能になり、国

際協りに働く青年隊員が現地の人と共に活動に専念できるようになると考える。

謝辞

それぞれの任地にて困難に遭遇しながらも、充実した活動で多忙の中、本調査に参加してくれたシリアおよびザンビアの隊員、そして協力をして下さった事務局の方々に心より感謝の意を表します。

注記

- (1) “longitudinal (縦断的)” や同段落の数行後に記されている “cross-sectional (横断的)” は異文化コミュニケーション論や心理学等における専門用語である。同じ意味で “synchronical (共時的)” や “diachronical (通時的・経年的)” といった用語が言語学、社会学では使用されているようである。
- (2) 男女合わせて100%にならないのは、性別に関し無回答者があったためである。

参考文献

Adler, P. S. (1975), The Transitional Experience: An Alternative View of Culture Shock, Journal of humanistic psychology, 15: p.13-23.

秋山剛 (1992), 異文化教育と自己への洞察について, 渡辺文夫編 『現代のエスプリ』, 至文堂, No.299: p.89-99.

----- (1998), 異文化間メンタルヘルスの現在, 秋山剛編 『こころの科学』, 日本評論社, 1月号: p.14-22.

荒木美奈子 (1992), 『女たちの大地: 開発援助フィールドノート』, 築地書館.

Arnold, C. (1967), Culture shock and a Peace Corps field mental health program, Community Mental Health Journal, 3 (1), p.53-60.

Benson, P. (1978), Measuring cross-cultural adjustment: The problem of criteria. International Journal of Intercultural Relations, 2 (1), p.21-37.

Berry, J., Kim, U. and Boski, P. (1987), Psychological Acculturation of Immigrants, Cross-Cultural Adaptation:

Current Approaches, Y. Kim and W. Gudykunst (Eds.). Newbury Park: SAGE, p.62-89.

Brislin R.W. (1981), Cross-Cultural Encounters, Allyn and Bacon, MA.

カウフマン, J.F. (1971), 青年と平和部隊, エリクソン, E.H.編 (栗原彬監訳) 『青年の挑戦』, 北望社, p.189-200.

Church, A.T. (1982), Sojourner adjustment, Psychological Bulletin, 91. p.540-72.

Dooley, D. (1990) Social research methods 2nd ed., Prentice Hall.

江淵一公 (1980), 異文化との対応のしかた, 星野命編 『現代のエスプリ』, 至文堂, 161: p.49-53.

----- (編) (1997) 『異文化観教育研究入門』, 玉川大学出版部.

Furnham, A. and Bochner, S. (1986), Culture Shock, Routledge, New York.

古畑和孝編 (1994), 『社会心理学小辞典』, 有斐閣

Gullahorn, J. T. and Gullahorn, J. E. (1963), An Extension of the U-curve Hypothesis, Journal of Social Issues, 19 (3): 33-47.

Guthrie, G.M. and Zektick, I.N. (1967), Predicting performance in the Peace Corps, the Journal of Social Psychology, vol.71, p.11-21.

Harris, J.G., Jr. (1973), A science of the South Pacific: analysis of the character structure of the Peace Corps Volunteer, American Psychologist, 28, p.232-47.

星野命 (1980), 概説・カルチャーショック, 星野命編 『現代のエスプリ』, 至文堂, 161: P5-29.

池沢佳菜子 (1998), 『はみだし教師のアフリカ体験』, 花伝社.

稲村博 (1980a), 『日本人の海外不適応』, NHKブックス.

----- (1980b), 海外在留邦人の不適応現象 文化摩擦の精神医学的研究, 『精神医学』, 医学書院, 第22巻9号, p.983-1010.

----- (1980c), 先進国と発展途上国における日本人の不適応現象の比較, 星野命編 『現代のエスプリ』, 至文堂, 161: p.150-162.

----- (1984), 留学生の問題 日本への留学生について, 『社会精神医学』, 第7巻1号, p.31-37.

石田弘美 (1998) 『アフリカで数学を教える 協力隊員のリベリア滞在記』, 同時代社.

石井敏他(編)(1997),『異文化コミュニケーション・ハンドブック』,有斐閣.

石村貞夫(1995),『SPSSによる統計処理の手順』,東京図書.

岩淵千明(編)(1997),『データの処理と解析』,福村出版.

河合隼雄(1980),在外日本人の適応・不適応についての臨床心理学的調査,星野命編『現代のエスプリ』,至文堂,161:p.102-119.

Kidder, L.H. (1951), *Research Methods in Social Relations*, Holt, Rinehart and Winston.

小林哲也(1980),海外帰国子女の適応,星野命編『現代のエスプリ』至文堂,161:p.83-101.

国際協力事業団(1997),『任国事情ザンビア共和国』.

----- (1997),『任国事情シリアアラブ共和国』.

国際協力事業団協力隊事務局指導相談課(1999),帰国隊員にとって日本は新たな「外国」か:「逆カルチャーショック」とのつきあい方,『JOCV NEWS』Vol. 20.

近藤裕(1981),『カルチャーショックの心理』,創元社.

----- (1980),海外駐在員の精神衛生の問題,星野命編『現代のエスプリ』至文堂,161:p.59-65.

久保田真弓(1999),異文化衝突悩み相談室1~3,『クロスロード』,青年海外協力隊事務局,2,3,5月号.

久米昭元(2001),青年海外協力隊隊員に見る適応と国際的資質.

Lysgaard, S. (1955), Adjustment in a foreign society: Norwegian Fulbright Grantees Visiting the United States, *International Social Science Bulletin*, 7, p.45-51.

牧野真理子(1995),青年海外協力隊にみる異文化ストレスと女性,『クロスロード』年5月号p.25-27.

中根千枝(1973),『適応の条件:日本的連続の思考』,講談社.

----- (1980a),青年海外協力隊の場合,星野命編『現代のエスプリ』,至文堂,161:p.132-149.

----- (1980b),カルチュア・ショック,星野命編『現代のエスプリ』至文堂,161:P31-40.

南場隆也(1989),『青年海外協力隊の参加動機の変遷及び参加による意識変化』,筑波大学大学院経営・政策科学研究科修士論文.

日系テレコム(朝日新聞:99年7月6日~2000年2月9日).

Oberg, K. (1960), Culture shock and the problem of adjustment to new cultural environments, *Practical Anthropology*, vol.7, p.177-182.

Schwimer B.E. and Warren D.M. (ed.). (1993), *Anthropology and the Peace Corps*, Iowa State University Press/Ames.

Taft, R. (1977), Coping with unfamiliar culture. In Warren, N. (ed.), *Studies in Cross-cultural Psychology*, Vol.1, London: Academic Press, p.121-153.

斎藤耕二(1996),『異文化体験の心理学 青年文化から異文化体験まで』川島書店.

青年海外協力隊事務局,『クロスロード』1995年4月~2001年5月号.

高井次郎(1992),異文化間ソーシャル・スキル・トレーニング,渡辺文夫編『現代のエスプリ』,至文堂, No.299: p.42-53.

高橋純一,渡辺文夫,大淵憲一(編)(1998),『人間科学研究方ハンドブック』,ナカニシヤ出版.

丹羽進(1996),隊員活動のトラブル脱出法,『クロスロード』1996年10月号p.38-49.

徳山道子(1998),日本語教師の異文化適応と社会・文化的要因,『異文化間教育』12号, p.128-143.

----- (1999),青年海外協力隊員が海外で直面した活動上の障害要因の分類,『国際開発研究』,国際開発学会,第8巻,第1号, p.65-79.

渡辺文夫(1992),異文化接触の心理学,星野命編『異文化間関係学の現在』,金子書房, P51-71.

----- (1992),技術移転専門家養成研究における異文化教育プログラム理論化にむけて,『平成3年度「異文化間コミュニケーション」研究会成果報告書』,JICA国際協力総合研修所, P17-28.

----- (1992),異文化教育の方法,渡辺文夫編『現代のエスプリ』,至文堂, No.299: p.22-31.

山岸みどり,井下理,渡辺文夫(1992),「異文化間能力」測定の試み,渡辺文夫編『現代のエスプリ』,至文堂, No.299: p.201-214.

Webページ

国際協力事業団(JICA)2000, <http://www.jica.go.jp/>

Abstract**Cultural Experiences of the JOCV in Syria and Zambia**

Hideki MARUYAMA and Asako UEHARA

Graduate Student/ Professor of IDEC

Graduate School of International Development and Cooperation (IDEC)

1-5-1, Kagamiyama, Higashi Hiroshima, Hiroshima, 739-8529. Japan.

E-mail: hidekim123@yahoo.com / auehara@hiroshima-u.ac.jp

The Japan Overseas Cooperation Volunteers (JOCV) are members of a project that the JICA designed and organizes to provide national aids to technologically developing countries. This study attempted to analyze cultural experiences of JOCV who were sojourning in Syria and Zambia in 2001. Specifically, the purpose of research was twofold: 1) To examine whether or not there were, if any, difficulties or problems that JOCV experienced during the sojourn, and 2) how their experiences changed while they stayed in the countries. A questionnaire was administered over 104 JOCV from August to October, 2001, and 60 completed ones were returned (the response rate: 57.7%). A major finding was that the longer they sojourned in Syria and Zambia, the better they had adjusted themselves to the environments. Data also indicated that the JOCV experienced physical, psychological, and socio-cultural problems, although they had positive experiences simultaneously. Further, results show that a small number of participants expressed their hostility against the sojourning countries and even one described his/her desire to commit suicide in the earlier period of the stay. Findings support previous studies (e.g., Furnham & Bochner, 1986) that assert cross-cultural adaptation is a process of cultural learning which contains both positive and negative experiences. Also, the authors suggest that further examination of the current supporting system is necessary.